Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-05-24

組織における成功の歴史と衰退に関する研究ー鐘紡の事例ー

松尾，健治

(Degree)
博士（経営学）
(Date of Degree)
2017-03-25
(Date of Publication)
2018-03-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第6834号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006834

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

学位論文審査要旨

氏名　　松尾　健治

論題　　組織における成功の歴史と衰退に関する研究－鐘紡の事例－

審査　　平成２９年３月

神戸大学

論文内容の要旨

本論文の目的は、過去に成功した組織が衰退する場合、なぜ、どのようにして衰退するのかを明らかにすることである。過去に高業績を挙げて成功を収めた組織が衰退するメカニズムについては、主に組織学習論の「有能性の罠（competency trap）」によって説明されてきた。しかしながら、有能性の罠については一定の疑問が残る。行為主体の反省性を考慮すると、環境の変化に俄には対応できずとも、一定の期間を置いて新たなルーティンを採用するなどして衰退からの脱却を図ることが想定される。組織学習論では、失敗からの学習を論じた研究もあるが、既存の有能性の罠に関する研究はそうした疑問に答えているとはいい難い。この他にも組織学習論の先行研究を俯瞰すると、これまで見過ごされがちだった「失敗の罠」や様々な論点が存在することがわかる。しかしながら、それらの研究領域は個別に研究を蓄積している傾向にあり、それらの関係について十分な議論がなされているとはいい難い。こうした状況が生じている原因は既存研究における分析の対象期間がさほど長くないことが考えられるが、その背景としては、衰退研究におけるデータ収集の困難性や、理論負荷的な分析といった問題が挙げられる。

そこで本研究では鐘紡を事例としてとりあげ、長期の衰退期間を含む、戦後40～50年程度を分析対象とした研究を行い、有能性の罠だけでは見過ごされてきた可能性がある衰退の因果メカニズムの発見を目指した。鐘紡は戦前、本邦民間企業中トップの収入規模を誇り、本邦を代表する企業でありながら、戦後徐々に衰退し破綻に至った本邦を代表する衰退事例である。しかしながら、鐘紡の衰退は有能性の罠では十分に説明できない逸脱事例である。本研究は単一事例による事例研究ではあるが、逸脱事例の研究によって従来見過ごされてきた変数や因果メカニズムを発見し、理論的貢献を行うことが目指された。また、事例の記述方法として理論負荷性を極力抑えた歴史的説明を採用している。加えて、個別性の高い記述を重視する歴史研究から、因果的説明を目的とする社会科学としての理論的貢献を行うため、推論法としてアブダクションを採用している。さらに、存在論および認識論的仮定を批判的実在論に求め、「理論」を事象の根底的因果メカニズムとして位置づけることによって、理論負荷性を可能な限り抑えた事例記述を行いつつ、単一事例ではあるが、事象の根底メカニズムとしての理論の発見を目指した。

また、本論文の事例記述そのものが経営史研究において一定の貢献を果たすことも副次的な目的として目指された。鐘紡は本邦を代表する衰退事例であるが、戦後の鐘紡を取り

上げた研究は限定的であり、そもそも経営史研究において衰退研究の蓄積は発展途上にあるといえる。そのため、本論文で可能な限り一次史料を用いて戦後の鐘紡について長期的な記述を行なうことは、企業のライフサイクルにおける後半生たる衰退を理解していく端緒となりうる。

こうした目的のもと第1章では組織衰退の研究を簡単に俯瞰し、中でも過去の経験との関係、継続性、変化を捉える組織学習論に着目して既存の理論研究のレビューを行った。そこでは上述のように、主流理論である有能性の罠に対する一定の疑問や、組織学習論（とそれに関連する議論）における様々な理論、概念間の関係について十分な議論がなされていないことが示された。第2章ではこうした既存の理論研究における課題を克服するための方法を考察し、鐘紡を事例として上述のような方法を採ることについて論じている。第3章からは事例の記述となっているが、第3章では予備的に鐘紡の略史を記述している。第4章では鐘紡の衰退の現象を記述する。具体的には資源の減少を数値面で確認し、それを招いた粉飾について記述している。そのうえで、粉飾を招いた要因として、①なぜ事業が不振だったのかという課題と、②なぜ事業部では粉飾が行われざるを得なかったのかという課題を提示している。第5章では、上記の課題□を明らかにするために、戦後の鐘紡の事業が不振に陥っていくプロセスを記述している。第6章では、上記の課題□を明らかにするために、業績目標の設定、業績目標の背景にあったビジョンの唱道、トップマネジメントチーム内部の状況を記述している。第7章では一連の事例記述をもとに、理論的考察を行い、衰退のメカニズムを明らかにしている。そのうえで、理論的貢献、方法論的貢献、実践的含意、経営史研究における含意を提示し、最後に今後の課題を述べている。

理論的貢献については第一に、組織学習論における「有能性の罠」だけでは説明できない衰退について長期的な視点で衰退の因果メカニズムの一つ類型を示した。第二に、組織学習論の様々な議論を長期縦断的な衰退メカニズムの中に、それぞれの関係を示しながら一定程度包含して位置づけた。第三に、Levinthal & March（1993）が思弁的な理論研究で指摘しながらも、その後殆ど見過ごされてきた失敗の罠を事例研究の中で取り上げ、具体的な事例の分析を踏まえて精緻化し、なおかつ有能性の罠との関係を見出した。第四に、レトリカル・ヒストリーが希求水準に与える影響を示した。また、レトリカル・ヒストリーそのものについても、既存研究では多くの場合、有益な効果をもたらす文脈で取り上げられてきたものを、本研究ではレトリカル・ヒストリーの負の側面を新たに指摘した。第五に、アッパー・エシュロン理論の視点を取り入れ、トップマネジメントチームにおけるメカニズムが、押し込み販売や循環取引といった新たなルーティンの創発を招いて資源の損耗に繋がることや、有能性の罠、失敗の罠を促進する要因になる、あるいは新たに学習したルーティンの失敗に寄与することを見出した。

論文審査の結果の要旨

本論文の目的は、過去に成功した組織が衰退する場合、なぜどのようにして衰退するかを明らかにすることである。論文では、戦前に大きく成功したもののその後衰退した鐘紡を事例に歴史的な分析を通して上記目的にアプローチしている。

本論文は、先行研究のレビュー、史料の検討とも十分かつ丁寧に行われた論文であり、理論的検討やデータ分析と示された結論とも十分に博士論文の基準を超えていると判断できる。その上で本研究の意義は次の3点にあると考える。1つは、組織学習論における理論的意義である。これまで組織の衰退を説明する主流の理論はいわゆる「有能性の罠」であったが、それだけでは説明できない事象について、長期的な視点から衰退の因果メカニズムの1つの類型を示したことである。特に、これまでの研究において見過ごされてきた「失敗の罠」に着目し、経験的なデータをもとに「失敗の罠」を精緻化したこと、また成功から衰退の因果において、有能性の罠→失敗の罠への連続的な展開を示し、長期的な衰退メカニズムを明らかにしたことは、組織学習論において大きな理論的貢献であると言える。2つめに、歴史的な資料を用いる組織論研究における一つの方法論的視座をしめしたことである。これまでの組織学習論を始めとする組織論では、特定の期間における因果メカニズムに着目して、理論的負荷の高い解釈を行い、理論の展開をはかってきた。その結果、歴史研究の立場からはいわゆる「プロクルーステースの寝台」問題が指摘されてきた。本研究では、これら方法論的課題について丁寧に検討がされた上で、アブダクションを用い、歴史的研究からの理論構築を行う一つの研究例を示した点は、当該分野における大きな方法論的意義であると言える。最後に、経営史の観点においても、企業の衰退の多くは産業の衰退と並行して議論されることがほとんどであり、個別企業の衰退を特に内部組織に着目して分析した研究は極めて少ない。本研究では、鐘紡という戦前戦後の間に成功と衰退そして破綻を経験することになる日本の代表的企業を対象にライフサイクル全般

を通した衰退の分析は極めて貴重であるということができる。

審査においては、示された事実に関するさらなる史料の検討と当事者の視座にたった分析について指摘がされたが、いずれも望蜀的なものであり、本論文が博士論文として十分な質であることはいずれの審査委員も認めるものであった。

以上の理由から、審査委員は、本論文の著者が、博士（経営学）の学位を授与されるに十分な資質を持つものと判断する。

平成２９年３月７日

審査委員　主査　教　授　鈴木　竜太

准教授　平野　恭平

教　授　平野　光俊